

第 42 回 渋沢栄一(から始める)研究会

2026 年(令和 8 年)3 月 28 日

報告者：(研究会座長)濱名均

テーマ：「世界を視る」

「世界を視る」見方・視座は実は多く存在します。そんな中で今回は「3つの視座から世界を視る」と題して日頃の研究・研鑽を報告します。

- * AI などは一切使用せずに、今までの濱名の中で構築されたもののアウトプットで行う。
- * 学術論文形式は取らずに、依拠する出典・資料などは開示せずに流れを重視した発表です。
- * 今までの渋沢栄一研究会の流れに考慮しつつも、「～から始める」研究会に比重を置く。

2 つ目の視座 (テーマ②)

② 『渋沢栄一の「未分化の学問体系」と武士道精神が壮大な明治の資本主義経済システムを産んだ』

実は上記のテーマに至った経緯として報告すべき点があります。かれこれちょうど 2 年ほど前でしょうか。本研究会の生みの立役者の一人である西村二郎さんと ZOOM にて 1 対 1 で 1 時間ほどの議論をしていた時に、渋沢栄一の「未分化の学問体系」という概念を発見いたしました。西村二郎さんの主張は、明治以降の西洋から輸入された専門化された学問体系は渋沢栄一の時代の学問には無かった。論語を中心とした四書五経のような儒学であり、それは専門化される以前の「総合知」というものではなかったのか、という指摘でした。

ちょうど濱名はその数か月前から、木田元の「ハイデガーの思想」(岩波新書)をハイデガー理解の最終決着として時間をかけて克明に読み込み、同時に西洋思想の限界点なるものを自分なりに模索し、超克する視座を求めて呻吟していた頃でした。ハイデガーはアリストテレス哲学の学徒であると同時にそれを乗り越えることを、生涯の目的としていたと言えます。アリストテレス(専門化を推進することによって今日的な学問体系を樹立していく。その意味で「学問の祖」と歴史上は言われている)以前の「未分化の学問」への憧憬があったと言い得ます。

若き日の渋沢栄一の学問的姿勢は「高崎城乗っ取り」や「横浜焼き討ち」計画の実行という極めて陽明学徒(学問・思想と行動の一致を目指す態度)的と言い得るものでした。それに彼の階級・階層である庄屋クラスの豪農は、剣術を習い心身を鍛錬するという武士道を実践するということがなされていたと思います。同じ階層では立ち位置は違ったものの「誠」の旗印を掲げた新選組の土方歳三や近藤勇がいました。その様な中の一人として「学問的姿勢・思想プラス武士道精神」に満ち溢れている若き渋沢栄一がいたのです。

その人物を天上で操る「天の意思」(これは濱名の造語か?)によって、高崎城乗っ取り計画を放棄して江戸に身を隠し、流れ込んでいた時に徳川慶喜に仕えていた幕臣の平岡円四郎との出会いがありました。

また徳川昭武の随行によって、「パリ万博」を見学するというチャンスに恵まれ（主君の徳川慶喜の計らいによって）、約2年間の渡欧体験をするということになりました。

パリ滞在は渋沢栄一にとって、ひいては明治の日本国にとってとてもラッキーなことであったと言え得ると考えます。当時のフランスはナポレオン三世の時勢であり、資本主義ではあったが、国家主導的であったと同時に修正資本主義（英国の産業革命の時点と比較して）であり、サンシモン主義とも言われていました。また英国ではロバート・オーエンなどの資本家でありながら社会主義的な考えを導入・実践する資本家層もいました。渋沢栄一が作った「養育院」の原型もこの時代の西欧（英・仏）には存在していました。

我が国は徳川の時勢では幕藩体制であり、「藩」の存在が経済社会の中心でした。渋沢栄一は近代化を急ぐという「官僚」の立場にいたこともありましたがその立場からは中央集権的にならざるを得なかったと言えます。第一銀行頭取の地位を終生（現役時代）貫きました。渋沢栄一が渡欧で体験したことは明治の資本主義の勃興期に大きな影響力を行使したと言え得ます。パリ滞在中の家庭教師役であったロスチャイルド系の銀行家のフリュリ・エラルから多方面でのアドバイス・伝授は、帰国後の渋沢栄一の経済を通しての我が国の国づくりに大きな影響を与えました。それと同時に冒頭部分で指摘した栄一を培ってきた「総合知」こそは、混乱の明治期に於いて無尽蔵とも言える渋沢栄一の能力、活動の源泉となったのではなかろうか。視点は変わるが晩年の民間外交（アメリカの大統領との複数の面会など）を可能にした情報ルートの存在は、この時に培ったフリーメーソンとの交流であったと想定するのが妥当な解釈であると思う。関東大震災時の海外からの援助や見舞が渋沢栄一の私邸に届く事などがそれを裏付けていると思います。

「藩」或いは「村構造」という日本人のDNAは、戦後の高度経済成長を可能にした官僚・企業人へと受け継がれていったと思います。今後の日本企業と日本社会はこのDNAをどのような形で保持し再構築（或いはアフターヘーベン・止揚）していくのであろうか？その際の経済社会体制は何が最適なのか？リーダーが持つ「武士道」（相手に対する思いやりの精神、克己の精神等）とフロアーが持つ「武士道精神」はそれを解く因子に、或いはリードする思想・哲学になり得るのか？アダム・スミス（グラスゴー大学の道徳哲学の教授。当時は経済学な無かった）が「諸国民の富」（国富論）に先立って出版した「道徳情操論」で述べているキーワードの sympathy（シンパシー）と武士道の惻隠の情には共通点がある。近代化した西洋（中世の教会の司祭からの独立）と東洋の武士道の共通点である。そのようなことへも更に研鑽を重ねて行きたい。

（終わりに）

3月19日・昨日お送りした「3つの視座」の第一『バックスミンスター・フラワーの宇宙

『船地球号』の視座。『アリストテレスの学問体系への挑戦』は、当研究会の第三期目突入に当たり作成した、二年間の研究会/読書会で辿り着いた(6+2)つの視点の第7番目のものの研鑽と言えます。つまり⑦「新しい資本主義」の哲学を考えて実現することの視点です。

その2項目目に「自然環境を含めた共生社会の実現」を目指す場合の哲学は何か？に該当するものとも言い得るものです。西洋諸国がアリストテレス哲学(専門化による各種の学問を打ち立てて行った)に準拠しながらも、専門化の壁に突き当たって呻吟している姿があります。それを1960年代に建築家で思想家のバックスミンスター・フラーが乗り越えようとしていた姿と思います。

それに対して本稿の「3つの視座」の第二テーマは、辿り着いた(6+2)の第1番目の視点「栄一のパリ万博、渡欧体験から読み解く視点」とのオーバーラップがあります。また同じく第5番目の視点『幕末の日本を平和裏に「勢力交代」を成した徳川慶喜、再考の視点』に隣接するものとして、武士道をもって「世の中を牽引していくリーダー像」また「そのリーダーシップの根源は？」にも迫り得たとも言えるかなと感じています。